

スペインの古写本にみられる

ビウエーラに関する考察

小 原 慎 一

東洋と西洋との一つの接点であったスペインに、殆んど古写本の細密画によってのみ知られるビウエーラ (**Vihuela**) と呼ばれる一群の有棹弦楽器が存在した。その音楽はビウエーラ・デ・マノ (**Vihuela de mano**) のそれを除いては残されていない。これらをヨーロッパの同系の諸楽器の変遷の中に如何に位置附けるべきであろうか。

(1)

13世紀～16世紀にかけて存在したビウエーラはほぼ3種類ある。演奏法の違いにより、撓で演奏されたもの、ビウエーラ・デ・ペンドーラ (**Vihuela de péndola**)；弓で奏されたもの、ビウエーラ・デ・アルコ (**Vihuela de arco**)；手、実際には指頭で演奏されたもの、ビウエーラ・デ・マノ (**Vihuela de mano**) の3種類である。

ビウエーラなる語を冠した楽器は他に数種類存在するが重要なものは上の3者である。

デ・ペンドーラ及びデ・アルコのビウエーラは共にアルフォンソ10世¹⁾の著した歌曲集「聖母頌歌集・カンティガス・デ・サンタマリア」²⁾中の細密画に描写されており、デ・マノはフェン・ベルムード³⁾の「楽器詳解」に記載されている。

ビウエーラ・デ・ペンドーラについて。

弦数はコピーがやや不鮮明なので定かではないが、一応3本認められる。これに対し糸巻は5個あるのでリュート或は本来の意味でのシター等に見られる如く最高音弦のみ単弦で他は複弦であるとも思われる。響孔は円形一個ではなくヴァイオリンの如く両側に半円形のもの二個となっている。胴は卵形、胸に斜に支持する。グローヴの辞典によればシター (**cither**) とされているがいわゆるシターとはかなり異った点が多い。勿論シターの名称も構造も共に変化に富んでおり、地域、時代、言語の変化に

伴って、英語 4 (*cittern, cithern, cither, cithorn*), 独語 2 (*Cister, Cister*), イタリア語 1 (*cetera*), フランス語 4 (*cistre, sistre, citre, cithare*)⁴⁾ 等多くを数えることが出来、また弦数、調弦法も異りザックスの楽器辞典によれば10数種を数えることが出来る。これ等の複雑な変化はシターのみならず古楽器に通例のことであり楽器そのものと名称とを対応させて考へることには限界があり、また同一の名称のもとに2種以上の調弦が、構造の差異があり、更に名称そのものが単なる音韻の変化に伴ったものであって、同一の楽器に対して多数の名称の存在する場合がある。つまり楽器の変化と名称の多様さは独立したものである場合が多い。しかし、このような多様さを持つとはいへ、シターと云う一群の楽器は次に述べる如きものとされている。

グローヴによれば、平らな背板と通常2本ずつユニゾンに調律された金属弦をもち、リュートの如きスペード形をした楽器でプレクトラム (*plectrum*, 撓) には羽根を用いる。

オクスフォードの辞典では、金属弦、16世紀まではプレクトラム、後にしばしば指頭により演奏された。多少リュート形だが背板は平らである。

ザックスは、前後面共に平らで浅く、金属弦、フレット (*frett*) のあるネック。指弾。1500年より1750年までの間のシターについては更に胴が下方に行くに従って浅くなっている点をあげている。⁵⁾

ガイリンガーは、バロック・ロココの楽器としてシターン (*cittern*) をあげており、中世後期の部にシトールをあげている。更にこのシトール (*citole*) はシターであり胴は卵形、弦はブリッジを越えて胴の末端まで張ってある、と述べている。⁶⁾

以上シターについては、リュートの如く縁板がなく、背面がふくらみ、西洋梨形をした胴と云う東洋起源そのままの形を変えることのなかった楽器に比較して、概念の明確さに欠けることが多い。ビウエーラ・デ・ペンドーラについて考えるときにも、用語と概念を明確にすることが第一に必要である。

シターは縁板と平らな背板とを持つことによってリュートとは明確に異っているが、外形はリュートのいわゆる西洋梨形で、リュートの如き円い響孔を持ち、金属複弦の強度を支持するために弦はブリッジを越えて胴の末端にとめられている。演奏はプレクトラムにより、または指頭によりなされる。

シターはこの様に規定されるべきであり、ガイリンガーのシトールは、ルネサンス以後のものはシターに、中世後期の卵形をしたシトールはサウンドホール型の型によって、或はシターに、或は弾奏フィーデルに分類されることになる。以上の規定により、時に見られるシターとツィター (*Zither*) との混同をさけ得、更には弾奏フィー

デルと呼ぶべき一群の楽器をシターと区別することによって、フィーデル (Fiedel) の発展分化に対する見方をより柔軟にすることが出来るであろう。

この様にシターと、弾奏されるフィーデルとを分離したのであるが、この弾奏されるフィーデルの代表的なものが、ビウエーラ・デ・ペンドーラである。この楽器は胴、響孔、大きさ等の特徴が次に述べるビウエーラ・デ・アルコの一つに極めて類似している。

(2)

ビウエーラ・デ・アルコ。

この楽器はカンティーガス・デ・サンタマリアには二種類あるとみられる。第1のものはキンスキーではビオラ・ダ・ガンバ (Viola da gamba) とされており、細密画のコピーによれば二個あって、形・大きさはほとんど変わらないが一方は3弦、但し糸巻は4個あるので或は4弦とみるのが正しいのかもしれない。他方は明らかに4弦である。胴は長円形で、表面には響孔と思われるものは存在しないばかりではなく、縁の部分にわずかに線らしいものが認められるのみで、一切の装飾は無くブリッジも認められない。そして楽器は演奏者の前面に立てたかたちで演奏されている。キンスキーがビオラ・ダ・ガンバと呼んだのはこの演奏形態によってであり、カンティーガス・デ・サンタマリアで使用されている名称ではない。

二個のうち一方は弓を弦にあて演奏中であることを示しており、他方は弓を弦から外し楽器の前面、特に表面板の状態がよく見えるようになっている。両者共に表面板には響孔と思われるものはない。外縁にある波線状のものが響孔に類するものと見ることが出来るが他に例を見出し得ない。又、半円形、C形、円形、小円形の点在等の響孔に比して、表面板の強度を著しくそこなうのでこれは単なる文様とすべきである。とすれば全く響孔のない有棹弦楽器が存在することになり、表面板の材質を木材以外の響孔を必要としないものに求めねばならない。ヨーロッパでは類似のものを見ることはないが、アジア、或いはヨーロッパ周辺では、表面板に皮膜を使用した弦楽器は極めて多く存在する。むしろアジアの有棹弦楽器の大多数がそうであるとすら云える。南スラヴのグスレ (Gusle)、東南アジアのソ・タイ (So Tai)、我国の三味線、中国の胡弓等例は多い。更に響胴表面にはブリッジに類するものが全くみられないが細密画全体の筆致が極めて明瞭な点から、画家の誤写、省略とは考えられないので、表面を構成する材質が(小面積の表板ならば可能であろうが)ブリッジを支えるに十分な

強度を持たない種類のものであることを示唆している。

一方演奏者の左手、弓の支持方法をみると、上向きの手、拇指を上、他の指を下にしたサスピネーション (**suspination**) の位置である。これはザックスによれば⁷⁾弓奏がヨーロッパに移入された殆んど初めから行われたプロネーション (**pronation**)、手は下向きで拇指を下に他の指を上にした位置とは違って、アジア的な大きな特徴となっている。この点はこの楽器が、ヨーロッパに移入されてからその影響を受ける程には時間が経過していないことを示していると思われる。多分この細密画が制作された頃の移入であろう。

これ等の細密画のあるカンティガス・デ・サンタマリアの著者であるアルフォンソ10世（実際には彼の命により著作されたと云うべきであろう）のみならず、当時のスペインの諸官廷には多数のトルバドゥールが迎えられ、特にアルフォンソ10世はビウエーラ奏者を寵愛したといわれる所から、⁸⁾上例の大小二種のビウエーラ以外にも多数の異ったビウエーラがヨーロッパ或いはアジアの各地から演奏者と共にもたらされたのであろう。以上の諸点から、この大型のビウエーラがアジアより移入されて間もないこと、皮膜の表面を持つ響胴の楽器であったことはほぼ間違いないと云ひ得る。

当時移入された多種類のビウエーラのうち、代表的なもの、細密画に残される程重要であったものがこれ等大小二種であったと考えられる。このうち皮膜面大型のビウエーラはその特異性から疎外され、ヨーロッパの同系諸楽器の主流とはなり得ず、これ等に影響を与えるものとすらなり得なかったのである。他方大いに関係があったとみられるのが第2の小型弓奏楽器である。

小型のビウエーラ・デ・アルコは、デ・ペンドーラに形も大きさもよく似ていて、糸蔵の状態、響孔ともにほとんど同様である。

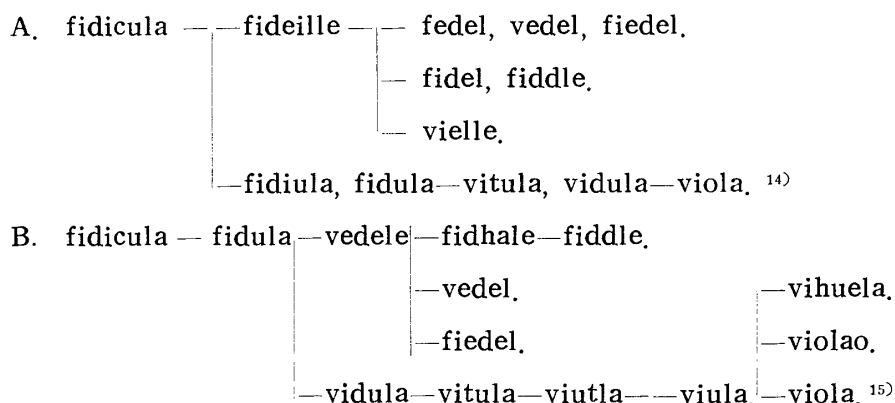
弦数は定かではないが、3本乃至4本、糸巻も3個又は4個認められる。響孔は半円形のものが両側に2個あり、肩にかまえて演奏している。

この第2のビウエーラについて述べるに当たって、フィーデルとビウエーラの一応明らかにしておきたい。

フィーデルはヴァイオリンの母体である意味で重要であるばかりではなく、あらゆる楽器中最も多様な変種があり、論議のある楽器群である。フィーデルが弓奏であるか否かについて、「フィーデルは中世の弓奏楽器中の主なもので、アジアに由来するが、ガイゲ (**Geige**) とは区別すべきである。⁹⁾」或いは「中世期に扁平箱形の胴を持つ弦楽器が現われて、リュートのように指で弾奏されたのがフィーデルである。¹⁰⁾」とあって対立し、両者とも一面的な記述である。フィーデルの語源についても、グローヴで¹¹⁾

は **viol, Fiddle** 共に、小牛・踊り手のとびはねる動き、を意味する **vitula** に由来するとしているが、ザックスはこれを否定している。ザックスの云ふ所はやや明瞭さを欠いているが、**vitula** 或いは **vitulari** の「小牛のダンス」は弓の上下運動を意味すると解釈し、更に10世紀以前にはヨーロッパには弓奏楽器の存在を示すものがないとして、**Fiddle** の語源を北方或いは西アジアの諸語 **fandir, féandir, feḏ i, feḏ ilo, fiḏ lu, fele,**¹²⁾ 等に求めているが、例えば **feḏ i, feḏ ilo** , はサモイエードのエニセイ方言で、ザックス自身これが「**Trommel**」を意味する言葉であることをカストレンのサモイエード語語彙集によって述べている。しかし「**Trommel**」は弦楽器に対してよりも打楽器に対して使用される言葉であって「打ち鳴らす」と「掻き鳴らす」との距離は「掻きならす」と「弓で擦り鳴らす」との間よりもはるかに大きいと云わねばならない。しかも現在エニセイも含めてサモイエードはジュズハープとタンブリン以外の楽器を所有してはいないのである。タンブリンの演奏を表現するためにこそふさわしい語「**Trommel**」が、本質的に異なる弦楽器の名称に何等かの影響を与えたとは考えがたいことである。この様な弦楽器或はその音楽を全く意味しない言語に起源を求めるよりも本来弦楽器を意味したラテン語 **Fidicula** に求める説の方がより自然であろう。**Fidicula** は **Fides** の縮少形でありはギリシャの **κithara** を含めて一般的に弦楽器または楽器の弦を示す語である。

この **Fidicula** の展開については下記の二説がある。



実際にどの名称がいかなる楽器に対応するか、どの段階で弓奏が採用されたか、或は再び弾奏となったかは不明である。上記のいずれを正とし否とするは言語学的な充分の検当が行なわれねばらず、二説を併記するに止めるが、原則的には両者は一致している。少なくともシベリアの古代北ヨーロッパの、打楽器しか想起させない語に起源を求めるよりはラテン語 **Fidicula** のゲルマン諸言語とロマン諸言語の展開の中に求める方が、はるかに説得力に富んでいる。

以上の如き経過をたどったフィーデルなる語は、フィーデルの特徴を持つ全ての楽器を時代と地域に限らず使用される場合と、ヨーロッパにおける主として弓奏の楽器を指す場合、或は英語における慣用語でヴァイオリンを意味する場合とがあるが、英語における使用例に大きく影響されて弓奏楽器に限定される傾向が強い。混乱を避けるためにここでは弾奏フィーデル、弓奏フィーデルの用語を用い、二者を含めた場合にフィーデルを使用する。ビウエーラ・デ・アルコの小型のものを弓奏フィーデルに、デ・ペンドーラを弾奏フィーデルに対応させる。

弓奏フィーデルの進化はかなり雑然としており直線的な進化を示してはいないが、一般的には胴とネックが分離していなかったものが長円形箱形の胴からネックが区別される様になり¹⁶⁾、12世紀頃から胴にくびれが付けられる様になったとされている¹⁷⁾。胴のくびれが現われたことは重要であって、梨型の胴がネックに近づくに従って細くなり、ネックが分離していない型のものを極くネックに近い部分でボーイングするか、駒が極めて高く円形に盛り上っているかでなければ演奏された場合に音楽は常にドロンバスを伴ふことになり、旋律のみを演奏することは困難であった。

これ等の一般的な進化の線上の中間に位置するのがビウエーラ・デ・アルコである。

(3)

再三言及したデ・アルコとデ・ペンドーラの類似は両者共通の起源をもつことを想わせ、この両者の形が弓奏フィーデルとしてのものなのか、弾奏フィーデルのものなのか、換言すれば本来弾奏された楽器に単に弓奏が取り入れられたのかどうかの問題がある。

弓奏のヨーロッパへの導入は10世紀前後とされるから弾奏がより古い演奏方法であり、この点からすれば弾奏フィーデルであるデ・ペンドーラはデ・アルコに先行した楽器であると云えるが、他の資料をも検討してみる必要がある。

12世紀の手写本「幸福の詳解」¹⁸⁾では戯画化されており質的に低いものではあるが、その限りにおいて弦数以外は全く同一とみられる楽器がやはり両様の奏法によって演奏されている。11世紀ラテン語手写本¹⁹⁾には二個の小円形の響孔を持つ弓奏フィーデルが描かれており、デ・アルコによい類似を示している。但しこの奏者は弓を持ちながらも明らかにこれを使用せず、第4指を弦に当て弾弦している。

更に遡れば、中世の楽器学にとって重要な9世紀のウトレヒトの詩篇²⁰⁾には極めて特

異なるスペード型をした胴を持つものがスケッチ風に描かれている。このフィーデルの妻者は弓の代りに極めて長い棒を持っており、ガイリンガーによれば²¹⁾図中の人物その他から判断して10フィートあり、この棒（或は弓）はヨーロッパにおいて弓奏がみられる最古の記録であり、実際には演奏不可能であったであろう巨大な弓の描写から、恐らく画家自身にとっても楽器を弓奏することが全く新しい経験であったことを想わせると述べ、正にこの時点において弓奏が移入されたのであり、この楽器が弓奏フィーデルであると断定している。

この長い棒についてはキンスキーもコピーの説明中で同様に弓であると述べているが、その正否については疑問な点がある。

第一に、ヨーロッパのフィーデルに関する絵画は現在までこのウトレヒトの詩篇以前のものが発見されていないことである。

次に画中のフィーデル奏者は左肩にハープをのせ、左手にフィーデルのネックを、問題の棒は右手に持ち、足は歩行中であることが示されている。顔は上に向けられ、ガイリンガーも指摘している通り明らかに盲目である。

同じ画中のこれもスペード形の胴を持つ長い棒のリユートとみられる楽器の奏者の着衣、フィーデル奏者のそれ、またハープを持っている点等をあわせ考えるならば、これ等の演奏者達は後世のハーディーガーディの奏者達を想わせるある種の階層に、街頭に楽器を奏でて生活をする音楽家達、に属していたと考えられる。

一方画そのものについては、スケッチ風であるがそれだけ全体にかなり手なれた描写であり、充分熟練した画家であることを示している。この様な画家が、それが如何に新奇なものであろうと、弓を全く操作不可能な10フィートもの棒に描写することはあり得ないであろう。フィーデルについてはかなり明確な描写をしているのである。以上からこの棒は、フィーデルを演奏するための弓ではなく、更に盲目の音楽家の生活に関する推定が正しいとすれば単に彼の歩行を助ける杖に過ぎないと云える。

ウトレヒトの詩篇のフィーデルは弾奏フィーデルであったとみるのが妥当である。

この弾奏フィーデルであったと推定される楽器の胴は次第に梨形から長円形へと変化して行く。この段階において弓奏が採用され、新しい条件のもとで楽器の形は変化した。弓奏の影響による変化は、これを弾奏する際には殆んど障害とはならなかった。弓奏フィーデル特有の分化としてはテールピースの採用があり、カンティガス・デ・サンタマリアのビウエーラ・デ・アルコにもかすかにそれらしいものが認められるが、先の11世紀古写本の、弓を持ちながらの弾弦、ミュンヘンの古詩篇²²⁾にみられるフィーデル等から、同一の楽器に対して弓奏・弾奏の両様の奏法が行われたことも

多かったであろうことが推定される。

それ等の結果から先に述べた諸手写本にみられる如く両者の形は殆んど差異のないものとなった。この様に、ビウエーラ・デ・ペンドーラ、ビウエーラ・デ・アルコ両者の形は、本来弾奏フィーデルに起源を持つものであったが、これより分化した弓奏フィーデルの変化したものである。しかし両者の類似は、カンティーガス・デ・サントマリアを最後として、一方はマネッセの手書²³⁾、ケルン聖堂の天使像にみられるもの²⁴⁾、フロレンスの本版画等²⁵⁾除々に胴のくびれを取り入れて弓奏フィーデルの型を確立し、他方デ・ペンドーラは長円形から更に梨形の胴へと復帰してシターへと移行したのである。

(4)

ビウエーラ・デ・アルコ、ビウエーラ・デ・ペンドーラと同様にビウエーラの名称を冠する第3の楽器。ビウエーラ・デ・マノは専ら指頭により演奏された。前二者とは異なり、前出の16世紀「楽器詳解」に始めて現われる。デ・アルコ、デ・ペンドーラが全くその音楽を残していないのに対して、ルイス・ミラン (Luis Milan, 1500? ~ 1561), ナルバエス (Luys de Narváez, 1510? ~?), ムダラ (Alonso de Mudarra, ~ 1570?), バルデラバーノ (Enriquez de Valderrábano), ピサドール (Diego Pisador), フェンヤーナ (Miguel de Fuenllana), ベルムード (Juan Bermudo), ベネガス・デ・イネストローサ (Luis Venegas de Hinestrosa), トマス・デ・サントマリア (fray Tomas de Santamaria), エステバン・ダーサ (Esteban Daza), アントニオ・デ・カベソン (Antonio de Cabezón) 等の作品が現存しており、ビウエーラ・デ・マノは、それ自身の音楽を持ち、ヨーロッパの他の部分における前古典の音楽を支えたりリュートの如く、或はそれ以上に16世紀スペインの殆んど全ての音楽を支えていた。²⁶⁾

特にミランのエル・マエストロ (El Maestro) と題する作品集は、シフラ (Cifra)²⁸⁾で書かれており、現代訳の楽譜がピアノ用³⁰⁾、更に望ましいかたちとしてデ・マノに最も近い類縁関係にあるギター用³¹⁾に編曲出版されている。しかしこれ等の音楽も16世紀の終りに至り、クラヴィコルド或いはビウエーラ・デ・アルコより発展したビオル系の楽器がイタリアを中心とするヨーロッパで発達しスペインへ移入されたため、音楽家達は制約の少ない、音量のゆたかなこれ等の楽器を得てビウエーラ・デ・マノからはなれて行った。

楽器としてのビウエーラ・デ・マノは、リュート属の楽器と異り平らな背板で胴は

弾奏楽器であるにも拘わらず内側にかなりくびれており現代のギターに類似しているが、ネックはやや短い。³²⁾ 楽器の図は「楽器詳解」よりのコピーがプホルの「ギターの歴史」(*La Guitarra y su Historia*) とオクスフォード音楽辞典に掲載されている。コンサイズ版のオクスフォード辞典では簡単にギター的一种と記し、プホルは大型のギターと云っている。³³⁾

当時ビウエーラ・デ・マノに対して一般民衆の間で使用されていたギターは、現代のそれと異りやや小型で4組の複弦が「古或いは低」(*a los altos, a los bajos. B—f—a—d',*) または「新或いは高」(*a los nuevos, a los viejos. c—f—a—d',*)³⁴⁾、稀に *F—H—d—g, G—c—e—a* に調律されていたが、新調律が代表的であり歌や踊りの伴奏楽器として使用されていた。この新調律のギターに低音の *G*, 高音の *g'* を加えた *G—c—f—a—d'—g'* がベルムードの音階と呼ばれ、ビウエーラ・デ・マノの最も一般的な調律であり、ミランを始めとする前記の諸ビウエーラ奏者の殆んどはこの調弦法によっている。³⁵⁾

これ以外には7弦のものがあり *G—c—f—g—c'—f'—g'* に調律されていた。³⁶⁾ 弦の構成については、6組全部が複弦であるとするもの、5組の複弦と単弦(最高音弦)の組み合わせとするものがある。³⁷⁾³⁸⁾

ギターとデ・マノとの関係は、外形は何ら変わる所がなく弦数の多少が、外形の大小の差となって現われたものである。一方は民衆の、一方は職業的音楽家の各々に異った音楽的要求によって分化したものであろう。

ビウエーラ・デ・マノは以上に述べた様な楽器であるが、その由来については不明な点が多い。デ・マノの特徴的な形、内側へのくびれは非弓奏楽器としては特異であり同じ名称を冠しているところから、ビウエーラ・デ・アルコが胴のくびれを獲得した後に弾奏楽器として分化したものとも考へられる。グローヴの辞典はビウエーラの類縁楽器である弓奏楽器に由来するものであろうと示唆している。³⁹⁾ しかし、カンティガス・デ・サンタマリアと「楽器詳解」との間の中間的資料は現在まで発見されていない。むしろカンティーガス・デ・サンタマリアの細密画中に、すでにくびれのある胴の楽器ギタラ・ラティーナ (*Guitarra Latina*) が存在し、これをデ・マノの原型とみるべきである。⁴⁰⁾ 一世紀後ギョーム・ド・マシヨウ (*Gullaume de Machaut* 1300~1377) は「ギタラ・ラティーナはギタラ・モリスカよりも弦数が多く、優雅に演奏された」と記しておりギターは健在であった。⁴¹⁾

13世紀以後のこれ等の楽器のたどった道程は次の如きものであったろう。

13世紀にスペインにもたらされたギタラ・ラティーナはさしたる変化もなしに17世紀

に至るまで主として民間の楽器として伝へられ、このギタラから更に音楽家のより高度な要求に従って弦数を増加し、大型化した楽器が分化した。新しい楽器はビウエーラ・デ・アルコ、ビウエーラ・デ・ペンドーラ以外にも、ビウエーラ・デ・フランダース⁴²⁾ (*Vihuela de Flandes*)、ビウエーラ・バスタルダ (*Vihuela Bastarda*)、ビウエーラ・デ・ブラソ (*Vihuela de Braço*)⁴³⁾ 等があり一般的に有棹の弦楽器に対して使用された名称「ビウエーラ」、そして他のビウエーラと区別するために演奏法を表わすデ・マノが加えられてビウエーラ・デ・マノと呼ばれる様になった。

ビウエーラ・デ・マノが13世紀のギタラ・ラティーナに由来することは確実であり、デ・マノの胴のくびれは、ギタラ・ラティーナのそれを継承するものとして説明されるが、ギタラ・ラティーナのくびれは何に由来するのであろうか。

ギタラ・ラティーナは先にも述べた如く弓奏フィーデルですら殆んどくびれを獲得していない時期にすでにこれを持っていたのである。

ギタラ・ラティーナをビウエーラ・デ・マノと、更に18世紀初期の5複弦のギター⁴⁴⁾と比較すると胴が一つの方向性をもって変化していることに気附く。18世紀のギターは現代のものよりやや細長いが、外周は全て滑らかな曲線で構成されているのに対し、ビウエーラ・デ・マノは更に細長く、くぼみと胴の肩の接する部分の曲線の滑らかさが失われている。ギタラ・ラティーナになるとこの傾向は決定的となり、肩の部分の曲線は完全に失われ直線的に折れ曲ってネックに続いている。

この傾向の極端なものがレンス (**Reims**) の寺院にある芸人の持つ楽器⁴⁵⁾に表われている。これ程極端ではないが12世紀末のサンチャゴ・デ・コンポステラ (**Santiago de Compostela**) の宮殿の彫刻に、同じくパルマ (**parma**) の洗礼堂の壁面に⁴⁶⁾にたどることが出来る。これ等の楽器は肩の角張った形と、糸蔵が円形ではなく長方形である点で弓奏・弾奏のいずれのフィーデルとも明確に区別される。この特徴はウトレヒトの詩篇中の横向きに抱えられ、弾奏されている楽器と共通のものであり、ギタラ・ラティーナの形はすでにこの時期に形成されていたものの様である。⁴⁷⁾

ビウエーラ・デ・アルコ及びビウエーラ・デ・ペンドーラが密接な関連をもって変遷をしたのに対し、ビウエーラ・デ・マノは極めて初期から独自の発展をとげたのである。

註

- 1) Leon 及び Castilla の王, 在位1254~1284. Alfonso X, Alonso el Sabio.
- 2) Cantigas de Santa Maria, Biblioteca del Escorial, G. Kinsky, Geschichte der Musik in Bildern, 日本語版。 Grove's Dictionary of Music and Musicians, Emilio Pjot, La Guitarra y su Historia, の図版による。
- 3) Juan Bermudo, Declaración de instrumentos.
- 4) Grove's Dictionary. Sachs, Real-Lexikon der Musikinstrumente, The Concise Oxford Dictionary of Music, Enciclopedia della musica, Ricordi.
- 5) The History of Musical Instruments.
- 6) Karl Geiringer: Musical Instruments
- 7) The History of Musical Instruments, p.277.
- 8) ホセ・スビラ, 浜田滋郎訳, スペイン音楽, クセジュ文庫。
- 9) 乙骨三郎: 西洋音楽史 (上). P.167
- 10) 黒沢隆朝: 楽器の歴史, P.253
- 11) 以下語源に関する記載は, 正確を期するために, 関係語は全て原語のまま本文中に使用する。
- 12) féandir, tawgy-samoj. (Trommel).
fe ð i, fe ð ilo, jennisai-samoj. (Trommel).
fandir, ossetic.
fi ð lu, old nordic.
fele, Norwegian
- 13) The History of Musical Instruments, p.274~275. 及び Real-Lexikon der Musikinstrumente, p.138—139.
- 14) 黒沢隆朝: 楽器の歴史, E.J. payne による。
- 15) Burtniecs: The Origin of Guitar.
- 16) Musical Instruments, p.74~75.
- 17) The History of Musical Instruments, p.277.
- 18) Beati commentarius, Add. Ms. 11695. British Museum, kinsky: 目で見える音楽史p.44.
- 19) Ms. Lat. 11550. Bibliothèque Nationale, Paris. Sachs: History of Musical Instruments, p.256.
- 20) Utrechter Psalter, Utrecht, Universitätsbibliothek, Kinsky: p.32.
- 21) Musical Instruments, p.74.
- 22) Psalterium Cod. lat. 3900, München, Staatsbibliothek, kinsky: p.45
- 23) Manessische Handschrift または Grosse Heidelberger Liederhandschrift, Heidelberg, Universitätsbibliothek, Kinsky: p.47.
- 24) Dom, Köln, Kinsky: p.42.
- 25) 14. Jhs. von einem italienischen Tafelbilde des Pal. Pitti in Florenz, Sachs: Real-Lexikon der Musikinstrumente, p.139

- 26) E. Pujol, : La Guitarra y su Historia, p.13—14.
- 27) Libro de musica de vihuela de mano. Intitulado El Maestro. Franc. Diaz Romano, Valencia, 1535~1536.
Kinsky: P.114, Enciclopedia della Musica, Ricordi.
- 28) 数字譜, Tabulature の一種. Ricordi, Buenos Aires, のカタログによると Libro de Guitarra por cifra, Cifra libro de Guitarra, Methodo para Guitarra en Cifra 等現在でも cifra が使用出版されている。但し cifra はその性質上, 指定された楽器の, 指定された調律以外では演奏出来ない。
- 29) El Maestro の一部写真版が Sachs: Our Musical Heritage, に載っている。p.132, plate XII.
- 30) Breitkopf und Hartel. Afinación de Bermudo によって編曲してある。
- 31) Emilio Pujol: Bibliothèque de Musique Ancienne et Moderne pour Guitare, Max Eschig, Paris.
- 32) Grove の辞典, Oxford Dictionary of Music. The History of Musical Instruments, P.345
- 33) Une guitare plus grande dans sa taille, E. Pujol : Escuela Razonda.
- 34) Guitarra y su Historia, p.16.
- 35) Sachs: Real-Lexikon der Musikinstrumente, p.169
- 36) The History of Musical Instrumentemts, p.345
- 37) La Guitarra y su Historia, p. 16.
- 38) Grove 辞典, Vol III, p.508.
- 39) 同上, Vol II, p480.
- 40) 画中にはギタラ, モリスカ Guitarra Morisca があるが, 明らかにリュート系の楽器であって Guitarra Latina との類似は単に名称のみにとどまる。
- 41) La Guitarra y su Historia, p.11.
- 42) flemish lute. Grove 辞典, Vol. V, p.508
- 43) Real-Lexikon dar Musikinstrumente, p.410
- 44) History of Musical Instruments, plate XXII.
- 45) Ménétrier, kathedrale, Reims. kinsky. p.42.
- 46) Palast der Erzbischöfl, Santiago de Compostela. kinsky, p.41.
- 47) Baptisterium, Parma. kinsky. p.40.
- 48) La Guitarra y su Historia, Fig.6. Fig.7.